# 奔別アートプロジェクト報告

札幌市立大学デザイン研究科　邢暁雪

## 1. はじめに

北海道近代化は炭鉱から始まったと言われている。1882（明治 15）年に石炭運搬のための幌内鉄道が全通して札幌が道都として発展してきた。日本経済を支えた炭鉱は今静かな眠りについている。炭鉱は産業としては衰退してなくなったが、2001（平成 13）年に「空知に残る炭鉱関連施設と生活文化」が北海道遺産に選定され、炭鉱の記憶を掘り起こすなどの地域振興活動も展開されている。地域再生に向けて炭鉱の記憶を生かすためには残すことだけではなく現在の視点も加えて炭鉱遺産を「場」として活用し、様々なイベントが行われている。この中には、2012（平成 24）年 9 月に三笠市にある旧住友奔別炭鉱のホッパーという施設をメイン会場にして開催された奔別アートプロジェクトがある。筆者は「日本における地域活性化事例研究の中国への適用方法に関する研究」をテーマとして勉強している。今回の奔別アートプロジェクトが地域活性化の事例の一つとして中国の類似する地域にも活用できないかと思って参加したので報告する。

## 2. 住友奔別炭鉱の歴史と石炭積み出すホッパーについて

奔別地域の石炭の発見は 1880（明治 13）年で、1900（明治 33）年に奔別の歴史は奈良炭鉱として初めて開鉱した。奈良炭鉱は 1928（昭和 3）年住友の経営となった。住友は三笠市内の唐松炭鉱によって北海道進出を果たし、その後奔別炭鉱を買収、さらに弥生地区の東邦鉱業弥生鉱を買収した。1960（昭和 35）年、奔別・弥生は統合され深部開発及び増産が図られた。1971（昭和 46）年 9 月、奔別炭鉱は住友石炭鉱業㈱の合理化で同社より分離され奔別炭鉱㈱（写真１）として操業したが一カ月後の 10 月に閉山、69 年の歴史を閉じた[1)]。

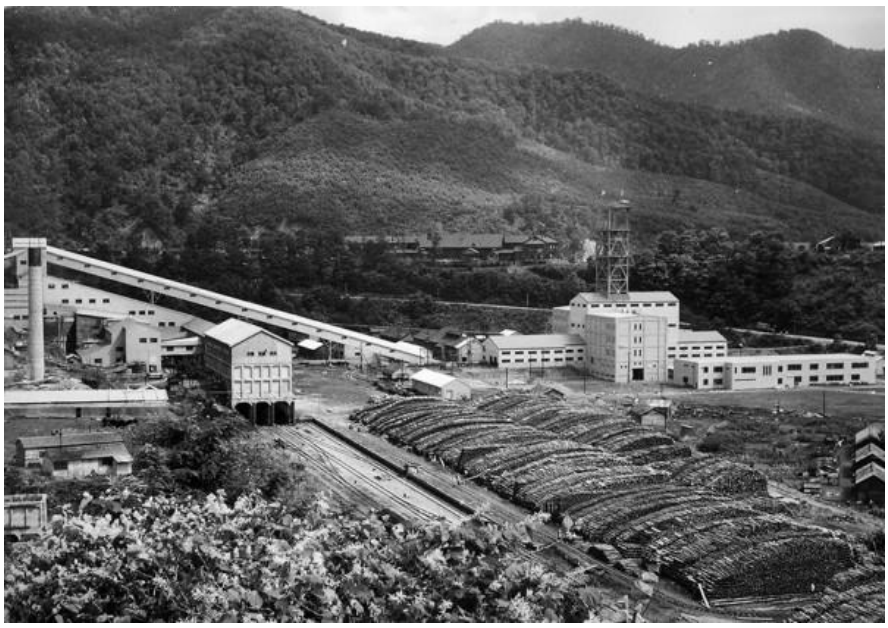


写真１　立坑完成時（1960 昭和 35 年）の奔別炭鉱全景

奔別立坑（写真 2）は 1960（昭和 35）年、深部採炭への移行と奔別・弥生両鉱統合の

ために建設され、当時は「東洋一の立坑」と呼ばれていた。高さ 50.5m、立坑深度 750m、内径 6.4m。一対のスキップ（石炭を揚げるための函）と、一対のケージ（人員・炭車のためのエレベーターかご）が設備され、立坑側面に「奔別」の字がある側（南側）から見て、右手側がスキップ、左手側がケージとなっていた。立坑は住友マテリアルの所有となっており、敷地はもとより内部の見学は一切許可されていない[2)]。

**写真 2　住友奔別炭鉱立坑櫓**

石炭積み出しのための精炭ホッパー（写真 3）とは精炭（坑内から選炭工程を経て製品として出荷する石炭）を石炭貨車に積み込むための施設である。高さ 20m（東側部分は 19m）、幅 13m、長さ 100m。1960（昭和 35）年に奔別立坑を建設した際、能力増強のため従来あった施設（施設西側の長さ 40m 部分）に増築し現在の姿となった。北海道遺産に選定されている空知の炭鉱関連施設の一つで、現存する石炭積み出しホッパーとしては国内最大規模で、内部には石炭貨車の引き込み線もあった[3)]。隣接する奔別立坑とともに石炭生産のシステムを理解するために不可欠で貴重な施設である。1971（昭和 46）年に閉山した後閉山対策のために国策でできた会社寒住プレハブが所有して団地の壁材、床材などのコークリートパネルを製造する。その後生コン製造の「ホッコン」が経営する（本社・深川市）新寒住プレハブがパネル製造を行っていた。現在は「ホッコン」が所有する。ホッパーを含む空知の炭鉱関連施設は北海道遺産に選定されているが、建物が老朽化したため、ホッコンは安全を確保できないとしてコンクリート部分を除いた施設上部を解体する方針を決定。三笠市に伝えていた。解体方針を示していた建物所有者から炭鉱の記憶推進事業団ＮＰＯが１年間賃貸契約を結び、保存・活用のために今回の奔別アートプロジェクトの会場として使用した。

写真３　旧住友奔別炭鉱・選炭施設内石炭積み出しホッパー

## 3. 奔別アートプロジェクトの概要

2012 年 9 月 22 日（土）～10 月 28 日（日）土日祭日のみ 13 日間の開催、NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団が主催、11 名のゲストアーティストと札幌市立大学の学生たちが参加、三笠市にある旧住友奔別炭鉱のホッパーをメイン会場にした奔別アートプロジェクトが開催された。会場内にはアーティストと札幌市立大学の学生の作品が 31 点程度設置され、アートの力によって炭鉱の記憶を掘り起こした。

会　　場：旧住友奔別炭鉱・選炭施設内石炭積み出しホッパー
会　　期:2012 年 9 月 22 日（土）～10 月 28 日（日）（土日祭日のみ 13 日間の開催）
公開時間：10：00～17：00（入場は 16：30 まで）
主　　催：NPO 法人　炭鉱の記憶推進事業団
協　　賛：公益法人　太陽北海道地域づくり財団、財団法人文化・芸術による福武地域振興財団、「北海道地域連動アートプロジェクト」/北海道地域連動アートプロジェクト実行委員会
参加者：【参加アーティスト】
端 聡、澁谷 俊彦 、高橋 喜代史 、今村 育子 、kensyo 、SARD（札幌地域デザイン研究会：酒井裕司、梅村守、町谷浩幸、松田建夫、嶋田健一)、上遠野 敏（ アートプロデューサー)
【札幌市立大学学生】
渡邊俊介、邢暁雪、余蕾、倉本祥平、1 年 3 組( 江口亜衣里・内海智美)、oyu（真井実里･松井彩)､恐怖の電気パン( 山下恵）､前田清也 ､ワコポコマイ( 真井実里・若生大地）、札幌市立大学美術部 nou me non：カクレポン( 小松秀之・山本倫子・若生大地）、前川沙綾 、ヤマモト（ 山本美★子・山本倫子）、フニャフニャ( 小坂友梨・諏訪敦美・山崎美咲・世永千尋）、2m( 上田瑞穂・横山咲希)、STU( 大塚めぐみ・菊池はるか・野上あかね・東出佳子・平中麻美子・二ツ川詩織)

図１　奔別アートプロジェクトのチラシ

## 4.　奔別アートプロジェクトの企画・制作と実施・運営

本プロジェクトは地域にある「炭鉱遺産」という資産を活用して、アートの力で炭鉱の記憶を掘り起こし、炭鉱記憶の未来への新たな価値の創造を通して若者を教育し、同時に地域を活性化するという目的で行われた。会場となったホッパーにはゲストアーティストと札幌市立大学の学生たちの作品が 31 点設置され、展覧された。

奔別アートプロジェクトは開催前企画の準備制作、展覧会運営、会期後の片付け作業という三段階があった。

### 4−1　準備制作

地元の住民の理解と協力を得るために準備制作に入る前、本学教授の上遠野敏と NPO の方は地域住民の代表の方々に事前にプロジェクトの概要を説明し、理解していただいた。開催前の準備制作の段階で学生達は連合町内会が世話してくれた町内会館に寝泊り、会場の準備（写真４）と作品の制作などの仕事をした。制作のために奔別入りした初日、大雨が降り、会場となるホッパーが水浸しになった。このため、雨でも足下が危なくならないように土のうを作りホッパーの入口前に敷き詰めることとなったが、幾春別の住民の方々が土のう用の土や袋を用意してくれるなど、いろいろと協力してくれた（写真５）。学生達は地域の方々とのコミュニケーションを通じて、地域の人たちと交流して奔別についての歴史や知識も得られた。札幌市立大学の学生たちは学校で勉強しているメデイアデザインの知識を用いて地域の方々からもらった知識も含めて奔別アートプロジェクトのチラシ（図１）、ガイドブック（図２）作り、NPO 炭鉱の記憶推進事業団と協力してプロジェクトのホームページの記事を作った。また、宿泊所に泊まり始めたとき幾春別連合町内会と幾春別中島町町内会・若手の童心会の皆様から温かいバーベキュー歓待をいただき（写真6）、地域の皆様と楽しく語らい、困ったことにも相談に乗ってもらい解決法を導いてくれた。このような交流とつながりがプロジェクトの真の成果なのだと思う。制作を始めてから雨の日や夜の宿舎ではじっと寡黙に屋内制作。晴れた日にはシンボリックな立抗やぐらをバックに炎天下にも

負けずに屋外制作。

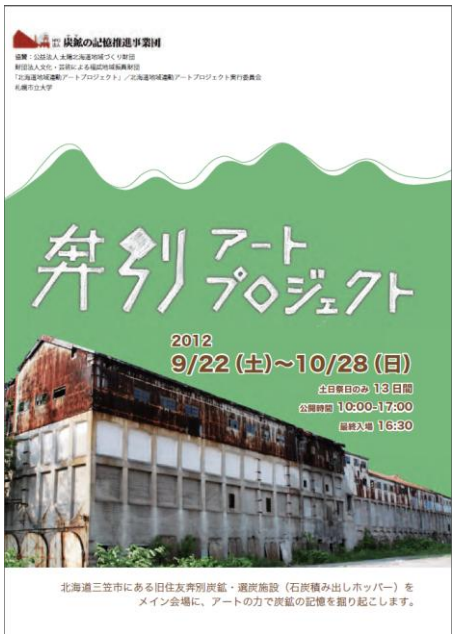



図２　奔別アートプロジェクトのガイドブック

http://pon.soratan.com/file/pamphlet.pdf

図４　地元の方々との交流会

図５　ホッパー内掃除

図６　土嚢を作る学生と住民の姿

## 4−2 展覧、運営

2012 年 9 月 22 日に奔別アートプロジェクトが一般公開された。公開の一番初めに、温かく見守り応援してくださっている地域の人々を招待してガイドツアーでそれぞれの作品を案内した。地域の人々に温かい言葉をかけていただき一同大いに励まされた。天気に恵まれたこともあり、最初の日には約 150 人の来場者があった。公開２日目午後 2 時からはオープニングセレモニーがあった。会場設営中に突然雨が降ったが幾春別の方々が大きなテントをご用意してくださるなど地域の方々の支援を受けた。幾春別の「童心会」の太鼓の演奏を　皮切りに吉岡理事長の挨拶、来賓の方々の挨拶に続いて、参加アーティストの紹介とそれぞれ一言述べてもらい、アートプロジェクトを一般の方々にも親しみやすいものとした。展覧会では札幌市立大学の学生はガイドツアーを担当して、来場者に奔別炭鉱の歴史と現状、作品のストーリを解説した。

炭鉱の歴史と未来、記憶と発展などの要素を含めて、上遠野敏教授の守護的存在となっている「モス地蔵」や「時代の壁」を表現する「R と θ と連結器」（渡邊俊介）針金で、精巧に立抗を再現していた「ＦＡＣＴＯＲＹ」（ワコボコマイ）など 31 点の作品が展覧された。筆者も「石炭の木」（写真７）という作品を作った。この作品は石炭の関連産業を木の形で表した絵である。石炭はエネルギー・化学産業の原材料として重要であり、精錬技術・化学合成・分解技術の発展に伴い、石炭から新たな産業が次々に生まれていることを伝え、人々の炭鉱についての記憶を掘り起こすことを意図している。また炭鉱の記憶推進事業が木のように伸びていく希望も含まれている。そして来場者とインスタレーションできるため、隣には「記憶の木」（図８）を用意して石炭に関する思い出などを書いて、吊るしてもらうことで段々完成することができた。来場された方々に「学校のすぐそばに石炭を運ぶ汽車が走っていた」という思い出や、「石炭を運びのトロッコが落としていった石炭を拾って家に持ち帰ったこと」、「暖かい」、「昔学校で使っていた石炭ストーブ」の思い出などいろいろ貴重の話もいただいた。

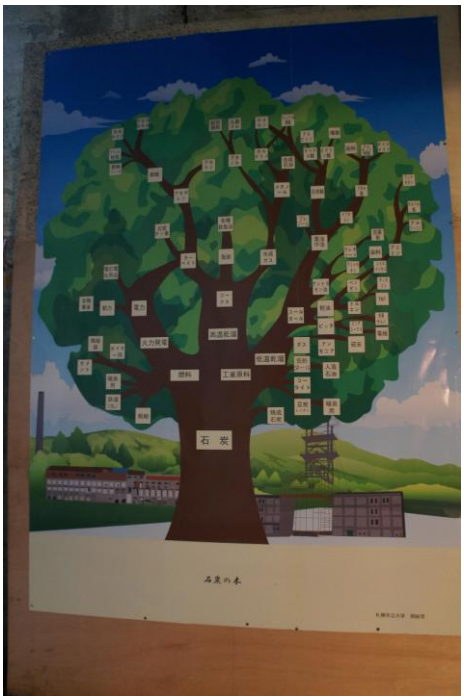



写真７「石炭の木」

写真８「記憶の木」

**作品紹介**

「ズリ山と緑」（写真９）　上遠野 敏

制作のために奔別入りした初日、大雨が降って、会場のホッパー内が水浸しになる事実を知った。雨でも足下が危なくならないように土嚢をつくり入り口の前に敷き詰める。この作品は余った土（赤ズリ）をズリ山に見立て作った。作品では、初めは熱を持ち、煙を立てていたズリ山は時間を経ちまた植物が生えて新しい命が芽生え（めばえ）自然に戻って緑になっていく様子を表している。

写真９　ズリ山と緑

「モス地蔵」（写真 10）　上遠野 敏

今回のアートプロジェクトを行うホッパーは、長時間に人に使われていない部分が多くあり、足下が不安定、ぬかるんでいるところも多い。全部で６体、入り口付近にいる地蔵は今回のプロジェクトの安全を祈り、プロジェクトに協力くださった皆様、これまでに炭鉱産業に関わった全ての方々への敬意を表した作品になっている。また「モス」とは日本語で「苔」（こけ）である。 苔によって自然に還っていくという意味も含まれている。これは元々置いてあったお地蔵様と思っているお客様も少なくない。

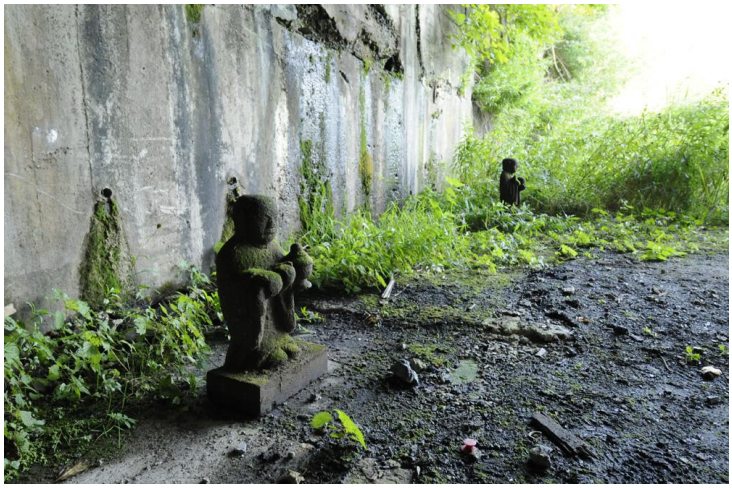


写真１０　モス地蔵

「もっと遠くに飛ぶために」（写真 11）　上遠野 敏

アクリルでつくられた透明なケースの中に「ガガイモ」という植物の綿毛が入っている。自然との共生に遺産の未来が見え、自然の強さのようなものを感じられる作品である。

写真 11　もっと遠くに飛ぶために

「C lock」（写真 12）　ヤマモト（ 山本美★子・山本倫子）

炭の粉が流れ落ちる時間をはかる「炭時計」である。タイトルのCは炭の元素記号（Carbon の C）を示して、使われている粉炭（こなずみ）はホッパー２階から採取してきた。

写真 12　C lock

「Irreversible」（写真 13）　冨田哲司

「Irreversible」というタイトルを日本語で翻訳すると「逆行できない」。使われている家具や電気など道具は全部元々ホッパーの内にあったものである。ジェッソを塗ることにより時間の一方向性というものを表している。また寂れているホッパーの中にあるものをアートの力で新たな価値を加える意味もある。

写真 13　Irreversible

「ご安全に」（写真 14）1 年 3 組（ 江口亜衣里・内海智美）

LED を用いるご安全にという言葉をイルミネーションにすた作品である。「ご安全に」という言葉は危険な作業が多い炭鉱マンのお互いに安全を気付くあいさつである。炭鉱マンたちは命の安全に注意しながら各産業に石炭資源を提供していた様子も想像させる。また LED という新しいエネルギーで元々炭鉱にあった言葉の看板を作って、当時の記憶と今の時代を繋いでいる意味もある。そして作者からお客様への「安全に見てください」と言うメッセージでも含めている。

写真 14　ご安全に

「アイ」（写真 15）　余 蕾（ヨ ライ）

この作品は広くて、足場もあまり良くない会場内で来場者の皆様に少しでも休みながらゆっくりご覧になるために目の形をイメージした形で作った椅子である。また目は外界からメッセージをもらう重要な器官として脳の中の記憶にも繋がっている。この作品では今目に見える豊かな世界を楽しみにしながら、昔に我々の生活を支えてくれった炭鉱のことも忘れないでくださいという気持ちもある。

写真 15　アイ

「ゆめの窓」（写真 16）　前川沙綾

会場に３ヶ所あるポイントで ARART というアプリケーションをインストールした i phone や i pad をかざすと動画を見る事ができると言う作品である。奔別に眠る炭鉱の記憶の映像を見える。

写真 16　ゆめの窓

「Factory」（写真 17）　ワコポコマイ　（若生大地、真井実里）

人々の生活を支えるエネルギーを生み出す工場という作品である。小さく精巧な針金で奔別立坑と同じ形の模型を作り、手前にあるハンドルを右に回すと仕掛けが動き出しながら「ポン」という音も発生して聞こえる。この「ポン」は奔別の「ポン」を表す。くるくる回るレインボーの仕掛けは、石炭の生み出すエネルギーを表現している。また設置されている場所に空いている窓からよく奔別立坑が見える。

写真 17　Factory

「ホッパーサウンド」（写真 18）　高橋喜代史

選炭施設で貨車に石炭を積み込む時の様子、過去に鳴り響いていたであろう音を擬音で視覚化している作品である。また「ガラガラガラガラ」と石炭が上から流れ落ちてきた様子を表現されている。

写真 18　ホッパーサウン

「no title」（写真 19）　高橋喜代史

写真 19

小さな人形の作品である。細かくてかわいらしい人形が 10 点ほどホッパー内に設置している。ホッパーの広い空間との対比が面白い。

「さしこむ光」（写真 20）　今村育子

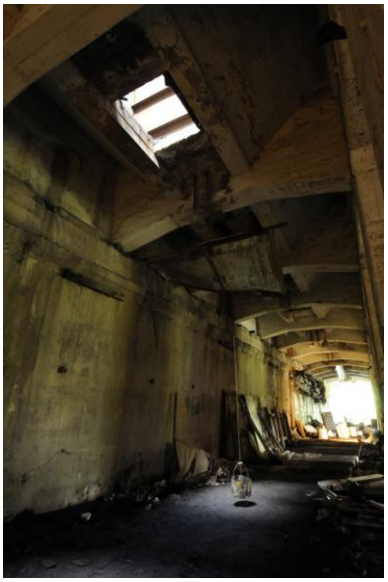


写真 20　さしこむ光

昔に石炭を落とすために空いていた天井の穴から今はからやわらかい光が落ちてくる。その光がまるでスポットライトのようになり、つるされたバケツを照らしている。その場所の美しさ、人工と自然の力を表現する上で「私たちはどこへ向かっていくべきなのか？」も考えさせる。

「住み着くなにか」（写真 21）　2m（上田瑞穂、横山咲希）

4 人の女の子はホッパーに住み着いているというイメージしている 4 点の絵画の作品である。多くの人々が働いていたホッパーが今閉鎖して誰もいなくなって廃墟のようになっていく。建物と一緒に歴史を見てきて、そんな廃墟に住み着く女の子たちをじっと見ていると、私達もホッパーはもちろん奔別の歴史を思い出し、想像するきっかけになる。

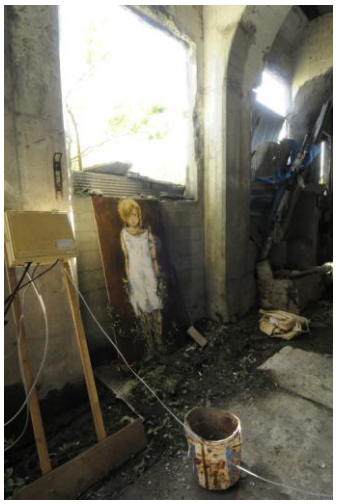


写真 21　住み着くなにか

「陽光のメディウム」（写真 22）　倉本祥平

写真 22　陽光のメディウム

太陽光を取り込んだクリスタルから生まれる光の彫刻である。窓辺につり下げているクリスタルがプリズムの働きをして虹（にじ）を映し出す。またメディウムとは「メディア」つまり「媒体」の語源で太陽の光と場所や記憶、思い出を繋ぐ。

「栄光と衰退」（写真 23）　上遠野　敏

写真 23　栄光と衰退

人や動物のキャラクターを奥の壁に映る「影絵」である。炭鉱産業の栄光と衰退の「ゆらめき」を表現している。また手前側には多くの元々ホッパーの中にあったものを道具として山のように置かれ、当時の炭坑マン達の様子をうかがうこともでき、特にホッパーで使われていた標語を書かれた看板は昔の記憶を掘り起こす。

「過去は今によって変わり、未来は今によって」（写真 24）　端 聡

揺れる水面に空と多くの国の言葉を映し出す映像がプロジェクションされている作品である。水は地球に不可欠な物質で、昔から今までの記憶を全て記録し、炭鉱産業が栄えた過去から現在、未来へ進んでいくメッセージも含んでいる。

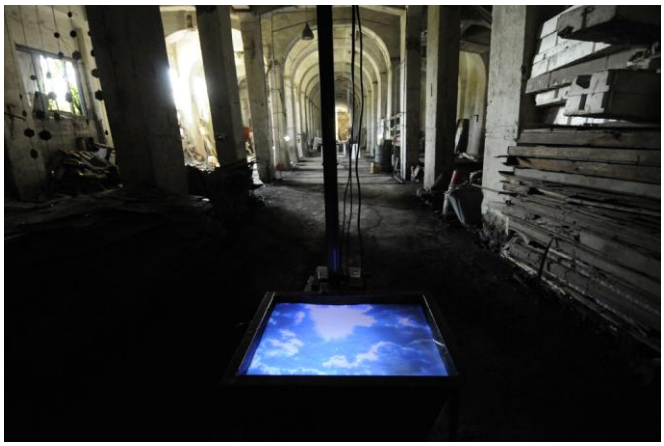


写真 24　過去は今によって変わり、未来は今に

「skin/texture」（写真 24）　kensyo

写真 24　skin/texture

女性の体の写真でつくっている美しい作品である。

「R と θ と連結器」（写真 25）　渡邊俊介

この作品の設置されている場所は直線的な柱と曲線的な柱の境目の部分に設置してあり、両者を隔てる「時代の壁」を表現し、まわりは張り巡らされた黒い糸とこ間中の鉄製

の枠結びついている。鉄製の枠は形状は電車の連結器の発展がイメージされている。会場であるホッパーの歴史の境界を空間ボリューム を繋ぐ形として見せる。

写真 25　R と θ と連結器

「降りそそぐ」（写真 26）　恐怖の電気パン（ 山下恵）

上から石炭が落ちてくる、当時のホッパーの様子を表現しました。ここから石炭が運ばれ、生活の営みを提供していたことは、忘れてはならない三笠の歴史である。

写真 26　降りそそぐ

「WHICH DO WE CHOOSE NOW?」（写真 27）　澁谷俊彦

今直面している最大の関心事は原発再稼働問題である。われわれの選択が次時代の運命をも左右する大きいな局面を迎えている。彩色されたカラフルな石たち。これらは様々なエネルギーの象徴である。石炭もまた化石燃料として、極彩色とは対極に美しく黒く輝いて見える。真の美しさとはなんでしょうか？わたしは問いかける。WHICH DO WE CHOOSE NOW?

写真 27　WHICH DO WE CHOOSE

「蘇生」（写真 28、29）　STU（ 大塚めぐみ・菊池はるか・野上あかね・東出佳子・平中麻美子・二ツ川詩織）

栄えていた頃から時が経ち、人が去り、老朽化した建物に雨水が溜まり、自然が萌えている現在の炭鉱の様子を、フィラメント（発光部）が外れ本来の機能を失った電球を使い表現した。

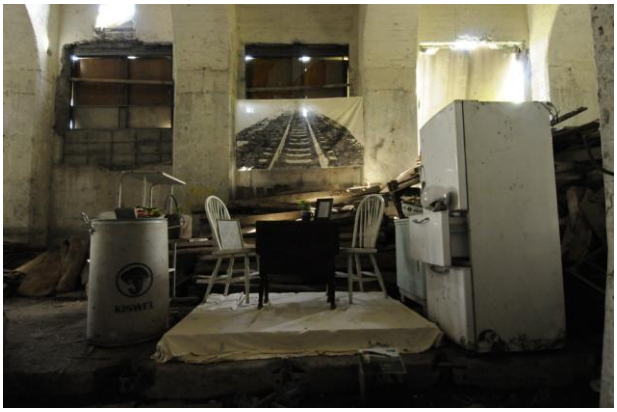
写真 28、29　蘇生

「みいつけた」（写真 30、31）　カクレポン

子供とのクレヨンスクラッチワークショップによって生まれた作品。鳥かごのように見えるものは実は炭鉱マンたちが脱衣所で使っていたロッカーである。このロッカーは紐を引っ張って高い所に吊るす事で、置き場の節約＆濡れたものが早く乾く、という良い所があった。この小さな炭坑マンが使った小さなタオルを小さなロッカーにかけた作品、近くにある子供たちの写真と合わせた。

写真 30、31　みいつけた

「T’ｓ room」（写真 32）　oyu（真井実里・松井彩）



過去の炭鉱マンの日常品で現代の生活空間を表現。過去・現在・未来をつなぐ部屋である。

写真 32　T’ｓ room

「かぶりつき乗車」（写真 33）　フニャフニャ（ 小坂友梨・諏訪敦美・山崎美咲・世永千尋）

夢にみたてた石炭を詰め込んだトロッコの先頭に乗って、ホッパーの出口から全国各地、世界各地へ飛び出す。

写真 33　かぶりつき乗車

「でんしゃ。でんしゃで、んしゃ。」（写真 34）　前田清也

写真 34　でんしゃ。でんしゃで、んしゃ。

ブルーシートなどの廃材をランドスケープに見立ててブラレールに電車を走らせた。ホッパーが炭鉱遺産でもあるが鉄道遺産でもある意億を蘇えさせた。

「黒い穴～”炭鉱の記憶”を未来へ～」（写真 35）　SARD（札幌地域デザイン研究会：酒井裕司、梅村守、町谷浩幸、松田建夫、嶋田健一）

圧倒的な迫力で聳え立つ奔別立坑櫓、直径 6.5mの縦穴が地下 750mの世界を一直線につないでいた。地下と地上の記憶は今日、過去と現在革新的技術や喜怒哀楽の記憶をつなぎ、そして変わらない未来、空の風景へ。

写真 35　黒い穴～”炭鉱の記憶”を未来へ

写真 36　階段

「階段」（写真 36）　ｄｅｓｉｇｎｄｅ　ｂｙ　酒井裕司

「点線文字」（写真 37）　高橋 喜代史

塵も積もれば山となる。対象物との距離感により存在が定義される。

写真 37　点線文字

「みえないとき」（写真 38）　今村育子

写真 38　みえないとき

音は見えない、時間も見えない。見えないものが不確かに存在する。時をきざむ音は過去を喚起する。記憶は次々と姿を変え、頭のあたりや心の周りに浮かび上がる。わたしたちは何をみて、何をわかちあえるのだろう。

「呼吸する石炭」（写真 39）　上遠野　敏

炭鉱産業の栄光と衰退をバルーンで表し、石炭貨車に見立てている。

写真 39　呼吸する石炭

## 5.　まとめ

今回の奔別アートプロジェクトは、13 日間の会期中に 2000 人ほどの見学者がいた。2000 人の中に三笠地元の炭鉱について記憶がある方もいるし、札幌から炭鉱やアートに興味がある方もいる。またインターネットで情報を見てわざわざ遠い東京や京都から来た方も少なくない。奔別アートプロジェクトによって昔の炭鉱について記憶を掘り起こすことができ、面白くて意味がある、またアートの作品に理解しにくいなどの様々な貴重な意見を来場者からいただいた。私たちの学生は炭鉱の栄光と衰退の歴史知識を学びながら、地元の人たちと交流し、自分の力を入れて作品を作って、生きた体験に基づいた制作がとても大きな意味をもつと感じた。

奔別アートプロジェクトは地域の足元にある固有資産である「炭鉱の記憶」を活用して、アートの力で炭鉱の記憶を掘り起こし、炭鉱記憶の未来の新たな価値を生み出しながら人材教育と繋がって地域を活性化する有効な方法と認められる。

奔別アートプロジェクトという事例によってアートプロジェクトは寂れている空間、地域の足元にある固有資産の活用、地域観光産業を発展させ、人材教育などの効果があると認定する。今後の地域活性化、魅力的な特色がある町づくりなどの事業にも活用できる方法であると考えている。

**引用**

１）奔別アートプロジェクト　住友奔別石炭
http://pon.soratan.com/%e4%bd%8f%e5%8f%8b%e5%a5%94%e5%88%a5%e7%82%ad%e9%89%b1%e3%81%ab%e3%81%a4%e3%81%84%e3%81%a6
２）奔別アートプロジェクト　奔別立坑
http://pon.soratan.com/%e4%bd%8f%e5%8f%8b%e5%a5%94%e5%88%a5%e7%82%ad%e9%89%b1%e3%81%ab%e3%81%a4%e3%81%84%e3%81%a6
３）奔別アートプロジェクト　ホッパー
http://pon.soratan.com/%e4%bd%8f%e5%8f%8b%e5%a5%94%e5%88%a5%e7%82%ad%e9%89%b1%e3%81%ab%e3%81%a4%e3%81%84%e3%81%a6